

競争と格差の社会から、調和の世界へ

<近代における進歩思想の登場>

近代に入り、西欧では人類は進歩するか否かをめぐって長い論争が行われました。それまでの人類の歴史において初めてのことと思われま

す。人間社会は古代都市文明以降も、人間の一生の生活はひたすら反復であり、風習が知恵でした。中世、近世に至っても、古典という言葉があるように、古えは規範であり、法でした。裁判でも判例は古ければ古いほど価値がありました。

しかし17世紀頃から、古代人、近代人優劣論争が起こり、18世紀の産業革命で科学・技術が飛躍的に発展したことなどから、進歩史観が優位となり、19世紀には、ヘーゲルの歴史を自由の精神の発展とみなす見解、マルクスの経済社会の発展段階説が登場し、とくにダーウィンの「種の起源」の発表（1859年）は人間進化論への決定打となったと考えられます。

20世紀に、バートランド・ラッセルは「自由は人類の進歩のために必要である」とのべて、進歩の理念を根拠に自由の権利を正当化しています。

<経済成長への一元化>

経済が主導の時代に入り、人類の進歩の主要側面は経済的発展、成長へ移ります。第2次大戦後、トルーマン米大統領が就任演説で「巨大な生産は繁栄と平和の鍵である」（1949年）とのべたように、20世紀後半の世界は産業経済の発展を社会の屋台骨とみなしてきました。

ところがいまや、過剰な経済成長は、地球の収容能力をオーバーし、地球物理学の見地からも「もしこれまでと同様の発想で右肩上がりの豊かさを求めていくなら、人間圏の存続期間は100年ほどだろう」（松井孝典）と深刻に指摘されるに至っています。

また新自由主義の下、世界各地での格差拡大、負債の未来世代への先送りなど不道德な政治の横行、さらに開発による地域収奪などが露呈して、いたるところ社会不安が増大するに至っています。

<幸福の公共の福祉への一体化>

経済成長は豊かさを得るためのものです。とりあえず豊かさは人間の幸福にとって無視できないことではありま

しかしアリストテレスは、幸福は、「快樂や富や名誉には存在しない」と言いきっていました。人間は本性上社会的存在であるから、その公共の場での善なる活動こそが幸福に該当すると説いたのです。

近代市民革命の時代の啓蒙の思想家たちは、古代ギリシャ、ローマの思想を復興させることになります。体制変革は壮大な共同事業であり、時代の意識は広い共同性へ向かいます。幸福とは快樂のような欲求充足ではなく、人間が学び、自己を向上させ、創意ある目的達成の共同プロジェクトに参加することが幸福であると強調されたのです。日本国憲法もこうした公共の幸福の見地を引きつぎ、「公共の福祉」が、「生命、自由及び幸福追求」など種々の人権に関係づけられ、しかもそれらを統御する上位概念とされています。

<幸福の小市民化>

けれども、西欧でも進歩史観が定着する19世紀になると、幸福は小市民的な個人の情念へと傾斜していきました。人間は尊大となり、「人間の偉大さに較べれば山の高さは一尺もないように思えた」などの表現も生まれてきます。人間は、アトム化し人間中心主義の下、限りなく自己満足的となり、行き着く先は物欲への集中となっています。もはや経済を人間文化の中心におくべきではないのです。科学・技術の進歩も、分化、限定されたもので、いわば部分的合理性の実現です。現代でもトータルな合理性は人間の叡智にあると考えられます。進歩も、もはや社会理念とすべきではないと思います。

<精神的価値の高揚を>

発展からとり残されてきた南側諸国からの精神的価値を中心におく次の提言は光明を与えてくれます。

「本当の開発とは、人々が人格を発達させ、尊厳ある成熟した存在に至る過程でなければならない」（1990年南側諸国委員会）

私は、競争と格差の文明から、調和と平和の文明へ舵を切り換えるときに来ていると思いますが、いずれにしろパラダイムチェンジは避けられなくなっているのです。

皆様はそれぞれ貴重な役割を果たすべき方々です。どうか御活躍のほどお願い申し上げます。

5月21日 一般社団法人くらしのリサーチセンター総会挨拶